The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世初期の和漢兼作作品に関する研究一句題和歌と詩歌合を中心に一
Author(s)	黄, 夢鴿
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101574
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　黄　夢鴿　）	
論文題名	中世初期の和漢兼作作品に関する研究 ―句題和歌と詩歌合を中心に―

論文内容の要旨

本論文は、中世初期（平安末期から鎌倉初期）の和漢兼作作品について考察するものである。特に句題和歌と詩歌合に焦点を当て、和歌と漢詩の詠法を考察するとともに、同時代の学問や文化的背景との関連性を検討した。また、従来、個別のジャンルとして扱われてきた句題和歌と詩歌合を、和漢兼作作品という大きな枠組みの中で捉え直し、両者の関わりを探ることを試みた。

和漢兼作作品とは、和歌と漢詩で構成される作品を指す。代表例として、漢詩句を題に詠んだ句題和歌、和歌と漢詩を番いとする詩歌合、さらには連歌の和句と漢聯句の五言漢句を連想のままに織り交ぜた和漢聯句が挙げられる。これらの作品を通じて、和歌が漢詩を一方的に受容する段階から、両者が相互に影響を及ぼし合い、最終的には融合に至るまでの変遷過程をたどることができる。和漢兼作作品は、漢文学の和風化、和文学の漢風化、さらには両者の融合による新たな文学的展開を示しており、当時の和歌と漢詩の交流の実態を考察するうえで重要な意義を持つ。

特に中世初期は、日本において和漢文学交流が大きく転換した時期である。漢詩文の一方的な受容から、『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』に見られるような、和歌と漢詩を対照的に扱う風潮が生まれた。このような風潮の中、句題和歌が依然として詠まれる一方で、詩歌合という新たな文芸形式が登場した。この二つのジャンルを同一の文脈で考察することは、当時の和漢文学交流の動向を理解するうえで不可欠である。そこで、本論文では中世初期の句題和歌と詩歌合に注目し、その中の漢詩と和歌はどのように互いに影響し合ったのか、そしてこの二つの文学形式はどのように関わりながら独自の発展を遂げたのかを検討した。

本論文は「句題和歌編」と「詩歌合編」の二部構成となっている。

まず、「第一部　句題和歌編」では、特に慈円と定家の『文集百首』（1218）を取り上げ、両者の詠歌態度の違いを明らかにし、さらに句題和歌の詠法の発展および同時代の文学動向との関わりを考察した。

第一章では、定家の『文集百首』に注目し、定家の句題への取捨態度について二句題を中心に検討した。定家の『文集百首』において、一句題では基本的に句題を忠実に詠んでいるが、二句題では、「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」だけでなく、「句題の一句だけを詠む場合」もある。本章では、部類や対句、詩句間の関連などから各句題の特徴を分析し、定家歌における句題への取捨基準を検討した。以上の分析により、「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」の句題はほとんど対句ではなく、詩句間が内容の関連あるいは因果関係を持っているため、和歌にすべて詠み込まれたと分かった。「句題の一句だけを詠む場合」の句題は対照的な内容を詠む対句が多く、主に和歌の部類に合わせて取捨されたことが明らかになった。さらに、定家の百首は、慈円の百首に比べて、句題の一部の句を省いて記す場合があり、誰が省いたのかは定説を見ないが、本章で検討した定家の句題への取捨態度を踏まえ、その句題を一部省いたのは慈円だと結論付けた。

第二章では、定家の『文集百首』における漢詩句の翻案方法を検討した。定家の『文集百首』では全体的に句題の内容を踏まえて詠もうとする傾向が見られるものの、句題の一部の表現や句を詠まない例も見られる。定家の句題和歌は厳密に漢詩句の翻訳とまでは言えないが、題となる漢詩句を踏まえて詠む点において翻案・翻訳の問題に深く関連している。そこで、本章では翻案・翻訳の観点から、定家の『文集百首』の和歌を忠実な翻案・省略・追加・置換の四つに分けて検討した。特に後三種に注目し、漢詩世界と和歌世界を踏まえて検討すると、定家は和歌の伝統的世界をもとに句題の内容を取捨・変更したと考えられる。本章での考察方法は、他の句題和歌の研究に活用できるのはもちろん、詩歌合においても題の詠まれ方が重視されており、翻案・翻訳の問題とも関連しているため、詩歌合の考察にも応用できる。

第三章では、慈円『文集百首』の詠作態度について、句題がどのように和歌に取り入れられ、さらに和歌ではどのような世界が構築されているかを踏まえて検討した。慈円の句題和歌は句題から逸脱していると指摘されているが、句題から逸脱する意図については具体的に論じられていなかった。本章では、具体的な例に沿って検討し、慈円歌は

句題を忠実に翻案するより、句題を踏まえつつもそこから離れて、伝統的な和歌世界に寄せて詠むことと、新たな和歌世界の構築に重点を置いたと分かった。慈円の作意は、「漢」の世界と「和」の世界の対照にあったと考えられる。慈円歌に見られるこのような特徴は、従来の句題和歌の詠法を拡張し、また詩歌合など和歌と漢詩を番えて対照させるという同時代の風潮にもつながっている。

以上、第一部の考察により、慈円と定家の『文集百首』における詠作態度の違いを明らかにした。定家は句題を翻案する際に、和歌の伝統的表現を踏まえて句題の表現を取捨する傾向にあるが、基本的に題として選ばれた漢詩句の流れや内容に沿って詠もうとする姿勢を持っている。つまり、定家は漢詩句を題と認識しており、その題を如何に和歌に翻案するかという点を重視する。それに対し、慈円は句題から離れて自由に詠む態度を示し、句題に描かれる「漢」の世界と和歌に描かれる「和」の世界の対照に重点を置いている。これにより、定家の詠法は従来の句題和歌の詠法と同じ文脈に属しているのに対し、慈円歌に見える和漢対照の詠法は当時成立した新たな文芸形式の詩歌合と同様の文脈に位置付けられる。以上、慈円と定家の詠法の差異は、中世初期における句題和歌の詠法の特徴と発展を示すものであり、また詩歌合など新たな文芸との接続をも示している。

次に、「第二部　詩歌合編」では、初期の詩歌合作品である『内裏詩歌合』（1213）および『和漢名所詩歌合』（1272年頃）を中心に、その漢詩句の詠法および同時代の学問や文化的背景との関連を検討した。

第一章では、『内裏詩歌合』における漢詩句の詠法を考察した。詩歌合の漢詩句の詠法は句題詩の対句部分の詠法と深く関連している。句題詩の詠法を踏まえて検討すると、『内裏詩歌合』の漢詩句は、『元久詩歌合』（1205）と同様に、題字の単純な言い換えとなる「破題」の詠法を取る場合がほとんどであるが、故事に関連する表現を用いる例もある。この故事に関する表現に注目すると、破題の表現を集めた類書から直接取り入れる傾向が見られる。このような詠法は故事を踏まえる「本文」というよりも語の単純な言い換えとなる「破題」に近いといえる。この点は、詩歌合という場において、和歌と漢詩は単純化されていたことを示唆する。

第二章では、『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の利用方法を検討した。『内裏詩歌合』の漢詩句には『和漢朗詠集』の表現を利用する場合が数多く見られる。それらの用例を、題の破題に用いる場合と破題以外に用いる場合に分類できる。さらに、儒者でない作者は『和漢朗詠集』の表現をそのまま用いる傾向があるのに対し、儒者である作者たちは故事や経典などを踏まえて『和漢朗詠集』の表現を工夫して利用する姿勢を持っており、作者の立場による詠作態度の違いを明確にした。

第三章では、公的な行事として行われた『元久詩歌合』や『内裏詩歌合』に対し、藤原基家（藤原良経の三男）が個人で作った『和漢名所詩歌合』について、その形式と名所題をめぐって考察した。まず、先行詩歌合と比較すると、『和漢名所詩歌合』は、自撰詩歌合という形式や漢詩句の作り方において従来の詩歌合を継承している一方で、名所題を採用する点は他の詩歌合と比べて特徴的だといえる。この名所題に注目して検討を加えた結果、名所題が採用されたのは同時代に名所詠が盛んだった時代背景の影響と考えた。また、選ばれた名所には隠者関係の中国名所や後鳥羽院を想起させる日本名所が多く、さらに後鳥羽院の和歌を本歌とする場合も見られるため、基家はこの晩年に作った作品に厭世の心と後鳥羽院への追慕の思いを託していると考えられる。このように、公的な場で作られた作品と異なり、私的な作品である『和漢名所詩歌合』からは、作者個人の工夫や感情の表出が見られる。

以上、第二部の考察では、初期の詩歌合における漢詩と和歌の詠法、さらに同時代の学問や文化的背景との関係性を踏まえ、詩歌合における詠作の特徴や、作品の公的・私的性格の違いによる詠作態度の差異を明らかにした。まず、『内裏詩歌合』の漢詩句はほとんど「破題」の詠法を取り、「本文」などを用いない点から、詩歌合の場に合わせて詩歌が単純化されたと考えられる。また、作者が漢詩文の教養が高い儒者とそうでない詠者によって『和漢朗詠集』の利用方法が異なり、当時の『和漢朗詠集』利用の実態がうかがえる。作品の性格については、順徳院内裏で公的行事として催された『内裏詩歌合』では、個人の志向や感情の表出が見出せないのに対し、『和漢名所詩歌合』は個人の作品であるため、題の選定や個人の感情の詠出が自由に行われた。

以上のように、中世初期の和漢兼作作品には形式や詠法に大きな変化が生じた。本論文では、これまで個別のジャンルとして扱われてきた句題和歌と詩歌合を、和漢兼作作品という大きな枠組みの中で再評価し、それぞれの作品の特徴に加え、他の作品や同時代の文学的背景との関連性を明らかにした。これらの考察を通じて、中世初期の和漢兼作作品における和漢交流の実態とその発展の様相を解明した。

和漢兼作作品は、和漢文学の交錯を示す資料であるとともに、文学作品が当時の社会的・個人的文脈の中でどのように受容され、発展していったかを考察するうえで重要な視座を提供している。従来の研究は、主に中世初期までの作品を取り上げてきたが、それ以降の和漢兼作作品についてもさらなる研究が必要である。今後の課題としたい。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　黄　夢鴿　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　大阪大学　教授	滝川　幸司
	副 査　大阪大学　教授	岸本　恵実
	副 査　大阪大学　准教授	浅井　美峰
	副 査	

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　中世初期の和漢兼作作品に関する研究―句題和歌と詩歌合を中心に―

学位申請者　　黄夢鴿

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　滝川幸司

副査　大阪大学教授　　岸本恵実

副査　大阪大学准教授　　浅井美峰

【論文内容の要旨】

本論文は、中世初期（平安末期から鎌倉初期）の和漢兼作作品について、特に句題和歌と詩歌合に焦点を当て、和歌と漢詩の詠法を考察するとともに、同時代の学問や文化的背景との関連性を検討するものである。従来、個別のジャンルとして扱われてきた句題和歌と詩歌合を、和漢兼作作品という大きな枠組みの中で捉え直し、両者の関わりを探ることを試みている。本論文は序章、第一部「句題和歌編」（第一章「定家『文集百首』における句題の取捨態度―二句題を中心に―」、第二章「定家『文集百首』における漢詩句の翻案方法―」、第三章「慈円『文集百首』の詠作態度―「和」と「漢」の対照の観点から―」）、第二部「詩歌合編」（第一章「『内裏詩歌合』の詠法―漢詩句を中心に―」、第二章「『内裏詩歌合』における『和漢朗詠集』の利用方法」、第三章「『和漢名所詩歌合』に関する一考察―形式と名所題をめぐって―」）、終章で構成される。

第一部では、慈円と定家の『文集百首』を取り上げ、両者の詠歌態度の違いを明らかにし、さらに句題和歌の詠法の発展および同時代の文学動向との関わりを考察している。第一章では、定家の『文集百首』に注目し、定家の句題への取捨態度について二句題を中心に検討し、定家は一句題では基本的に句題を忠実に詠んでいるが、二句題では、句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合、句題の一句だけを詠む場合があると指摘する。句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合の句題は対句ではなく、詩句間が内容の関連あるいは因果関係を持っているため、和歌にすべて詠み込まれていたこと、句題の一句だけを詠む場合の句題は対照的な内容を詠む対句であり、主に和歌の部類に合わせて取捨されたことを明らかにした。第二章では、定家の『文集百首』における漢詩句の翻案方法を検討している。定家の『文集百首』の和歌を忠実な翻案・省略・追加・置換の四つに分けて検討し、特に後三種に注目し、定家が和歌の伝統的世界をもとに句題の内容を取捨・変更したと指摘している。第三章では、慈円『文集百首』の詠作態度について、句題がどのように和歌に取り入れられ、さらに和歌ではどのような世界が構築されているかを検討している。慈円は句題を忠実に翻案するより、句題を踏まえつつもそこから離れて、伝統的な和歌世界に寄せて詠み、新たな和歌世界の構築に重点を置いたと指摘する。慈円の作意は、「漢」の世界と「和」の世界の対照にあったと考えている。以上、第一部の考察により、慈円と定家の『文集百首』における詠作態度の違いを明らかにしている。

第二部では、初期の詩歌合作品である『内裏詩歌合』及び『和漢名所詩歌合』を中心に、その漢詩句の詠法及び

同時代の学問や文化的背景との関連を検討する。第一章では、『内裏詩歌合』における漢詩句の詠法を考察する。当時の一般的詠法である句題詩詠法を踏まえてはいるものの、本来典拠を踏まえる部分に、典拠の自身からではなく類書から直接取り入れる傾向が見られ、語の単純な言い換えとなる「破題」に近く、より単純化された詠法であると指摘する。第二章では、『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の利用方法を検討する。『内裏詩歌合』の漢詩句には『和漢朗詠集』の表現を利用する場合が数多く見られるが、儒者でない作者は『朗詠集』の表現をそのまま用いる傾向があるのに対し、儒者たちは故事や経典などを踏まえて『和漢朗詠集』の表現を工夫して利用する姿勢を持っており、作者の立場による詠作態度の違いを明確にしている。第三章では、『和漢名所詩歌合』について、その形式と名所題をめぐって考察する。先行詩歌合と比較して、自撰詩歌合という形式や漢詩句の作り方において従来の詩歌合を継承している一方で、名所題を採用する点は他の詩歌合と比べて特徴的であること、選ばれた名所には隠者関係の中国名所や後鳥羽院を想起させる日本名所が多いこと、さらに後鳥羽院の和歌を本歌とする場合も見られるため基家はこの晩年に作った作品に厭世の心と後鳥羽院への追慕の思いを託していることなどを指摘する。以上、第二部の考察では、初期の詩歌合における漢詩と和歌の詠法、さらに同時代の学問や文化的背景との関係性を踏まえ、詩歌合における詠作の特徴や、作品の公的・私的性格の違いによる詠作態度の差異を明らかにした。

終章では以上の点をまとめ、今後の課題を述べる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、題目に示された和漢兼作作品の中でも、中世初期の句題和歌と詩歌合を中心に検討を加えたものである。序章、終章を挟んで二部構成で、第一部が句題和歌編として、藤原定家と慈円による『文集百首』を取り上げ、第二部は詩歌合編として、『内裏詩歌合』『和漢名所詩歌合』を検討している。

本論文は、既発表論文５本及び書き下ろし論文１本に序章・終章を付して再構成したものだが、うち１本は、全国学会の査読誌採用論文、また１本は海外の査読誌に掲載された論文、そしてまた１本は英語で刊行された論文を博士論文に収める際に日本語訳された論文で、査読誌掲載はもちろん、学外雑誌、国際査読誌などに掲載されており、国際的な視点においても評価されている。

本論文でもっとも評価されるのは、句題和歌、詩歌合という、近い性格を持つ作品ではありつつも、個別に扱われていたものを総合的に取り上げて、その関係について論じたところにある。重なっている時代に作成されてはいるが、それらを総合的に検討し、この当時の「和」と「漢」の文学を総体的に捉えようとする研究は希であり、その意味でも評価される。その検討により、特に慈円の『文集百首』における和漢対照の詠法は、詩歌合に通じる詠法であり、これまで個別に論じられてきた句題和歌と詩歌合の関係性について新たな視点を見出したことは高く評価される。

第一部で取り上げられる、『文集百首』については、少ないとはいえ先行研究や注釈も存するが、特に慈円の和歌と句題の関係を論じる中で、句題は単なる題ではなく独立して漢文世界を表しており、和歌はそれと対照的に和の世界を表すという、和漢対照の方法を持っていることを指摘したことは大きい。これは同題で漢詩と和歌を番えるという詩歌合と方法的に繋がるからである。第二部の『内裏詩歌合』『和漢名所詩歌合』については、ほぼ先行研究がなく、詳細な読解は行われていなかった。それらの作品を取り上げ、注釈的読解の上に論を組み立てたところも評価される。そして、特に『内裏詩歌合』の漢詩句の詠法に関する新見は注目すべきである。句題詩の詠法に準じると指摘されたことはあったものの、これを丁寧に分析した上で、句題詩詠法で重要な「本文」（中国故事を踏まえて詠む方法）については、中国故事の内容に密接に関わる詠法ではなく、表面上の語彙

による表現がなされ、それは類書などの語彙集に基づく詠法であり、また、当時幼学書としても利用されていた『和漢朗詠集』の語彙も多く利用されていることも、類書利用と同様な方法であったと指摘する。これによって、句題詩詠法がさらに簡便化されたことになり、より簡易な漢詩作成の方法となったことが明らかにされたのである。そして、これは同時代の句題詩（七言律詩）の詠法との繋がりも視野に入れて、鎌倉期の漢詩に関する新たな視角を獲得することになろう。これまで本格的に読解されることのなかった作品を取り上げることで、この時代の文学に新たな光を当てたことになる。

以上、本論文は、句題和歌、詩歌合について、文学史上にあらたな位置を与えた論として評価できる。しかし、本論で大きな価値を持ち、「和漢対照」についての説明が不十分である点、また、漢詩を題として和歌を詠むことについて、翻訳、翻案などの用語を用いるが、定義が曖昧なまま用いられている点などは慎重な配慮を必要とするところであった。さらに重要なところでは、第二部詩歌合編では、漢詩句の検討が中心になっており、和歌の検討がほぼなされていないのは、重大な不足であろう。しかし、これは今後の課題としてさらに追求するべき点でもある。

このようにさらに考察を深めるべき点はあるものの、先行研究で扱われることが希な作品を取り上げ、鎌倉初期の文学史に新たな視角を加えた点は高く評価される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。